北刈

異素六帖

上

表紙	三寸六分	コヨ	
	五寸二分	テタ	
木文枠	三寸	コヨ	
	三寸八分	テタ	

異素六帖序

世之在宇宙者也夥矣陰陽之煦蒸萬殊之區別苦樂渾淆情愛逼迫悪可勝言乎放心六合卷悟密室蟻動為牛鳴者聰之乖也蚊足為鬼脛者明之異也若夫知乖異之所以為乖異則豈無乖異歟

近覽異素六帖太素可以滌哉滌而後為萬々多々之色如夫有色則必有想有想則樂亦在其中矣二十五有之中有北鬱單越又名北俱盧州翻勝處勝東南西之三列大樂長壽無憂管弦之絶地也事見寶雲經當今謂之北州者方語之畧也於爰乎序

寶曆七丁丑載孟春良辰

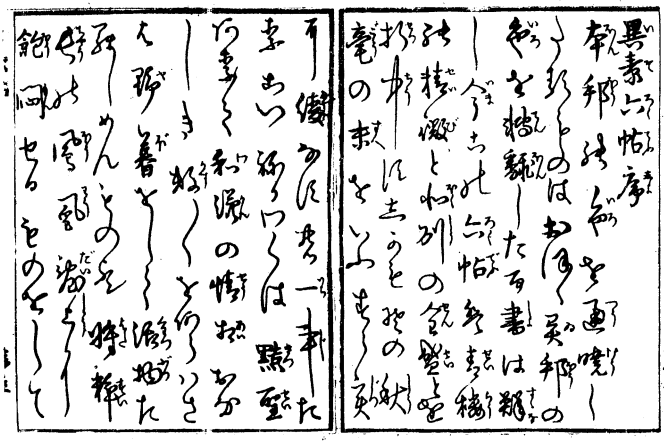
无々道人

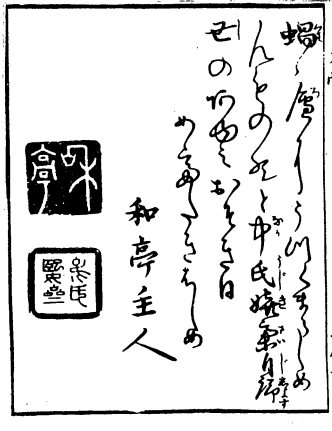
異素六帖序

世の宇宙に在る者や夥し。陰陽の煦蒸。萬殊の區別。苦樂の渾淆。情愛の逼迫。悪んぞ言ふに勝ふ可けんや。六合に放心し。密室に卷悟す。蟻動を牛鳴とな す者は。聰の乖なり。蚊足を鬼脛となす者は。明の異なり。若し夫れ乖異の乖異たる所以を知らば則ち豈に乖異なからんや。近ごろ異素六帖を覽る。太素以て染むべし。而る後に萬々多々の色を爲す。如し夫れ色あれば則ち必ず想あり。想あれば即ち樂も亦其中に在り。二十五有の中。北鬱單越あり。又北俱盧州と名づく。勝處と翻す。東南西の三州に勝る。大樂長壽無憂管弦の絶地なり。事寶雲經に見ゆ。當今之を北州と謂ふは。方語の略なり。爰に於てか序す。

寶曆七丁丑載孟春良辰

囲 囲 无々道人





異素六帖序

本邦の色を通暁したるものはおほく。異邦の色を轉翻したる書は鮮し。今この六帖は。青樓の耦徴と北州の全盛とを折中す。しかもその秋毫の末をいふすら実に綾なすの一事たり。こいねかわくは。點聖ありて。和漢の情相おなしき救〳〵をあらはさば。野暮をして。活物たらしめんもの歟。將粹長の鳳凰臺上に。飽悶せるものをして。蝸廬にうづくまらしめんもの歟と。中氏嬉齋自序。

丑のあゆみおそき日

めでたきはしめ

和亭主人

異素六帖

發例

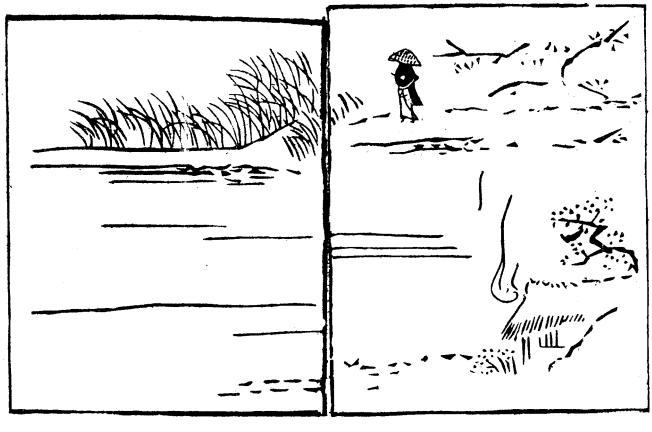
三つの徑踏わけがたき葎か宿。ひとつ寵は寒食の家を欺き。米櫃の中は塵積て山姥に似たり。いさかふべき妻しなければ。摺小木も柱にかゝりて。蛩の聲に睡り。野分の外に立ましわるべき人なきに。壁を隔て聞ゆるは。みたけしやうじにもあらて。いと喧しくいゝ劬るに驚てさし覗けは。あやしのおのこ三人ありて。ひとりは歌學者とみえて。一人は儒者なるやらん。今ひとり浮屠の道にかしこきにて。口〳〵爭つのり。心の浪たちてさわかしきも。おつればおなし谷川の。流れの身の事とそなりけるおかしさ。忍ひかねて吹出してもきこえばこそ。いよ〳〵つのる言種を、筆おつ執ば。

仏者すこしせいたる氣色にて。いへ〳〵今も申通り。街賣女色といふ事がござるはさ。哥學者たばこをつきなから。そうおつしやるな。天地ひらけ初りて。あなうれしとの給ひし。又は出雲八重垣の神詠より。陰陽和合自然天然の色事は。傾城買ては濟ませぬ。諺にさへ誠なしといふものを。正直の首にやどり給ふ。神國の操ではござらぬ。ハテみほつくしの卷にも。仏者がいわく。これ〳〵これ。その源氏物語の憂樂も。皆無常の夢のうき橋と成りはてるではないか。此間二人も腮に思ひ入あり。そこじやに依て。其著を離れるための遊女＋御聞なされ。既に經にも引導衆生令離諸着と御說なされたは。衆生を吉原へ引つれて。諸の執著をはなれ。彼と三昧に入るべうにとの。御心遣ひでこざる。といふてあたまの汗をぬぐふ。又若一日。若二日。若三日乃至七日とあるも。皆居續事で。哥學者吹からあらくはたきなから。いやもふこなた。それほと賣色御執心ならば。仏者相應によし町へでもこされ。仏者云。わるい御了簡。わたくしが無心所着の德は。遊君淺妻のうへではござらぬか。とたゝみをたゝく。哥學者。いやさそれでは。仏者。ハテ。まだ合点さつしやれぬ。哥學者。いゑ〳〵〳〵〳〵。儒者扇を叉にかまへて。片手をあげ。おふたりともおだまりなされ。既にかた〳〵よらずかたよらず。是を中と申す。そなた衆の樣にかたよりたがるへんくつではまいらぬ。しかし遊ひといふ事を論すれは。仏道ておつしやる北倶盧州。また北州とも申す樂第一の所。色の中に遊びあり。遊ひの中に色ある事。聊まされりともいふべきか。それゆへ十に八九は。北〳〵とうなつきます。賣色好はかりでいふてはこさらぬが。

去なから。遊ふ事必方ありと申て。方角のきわまりてある事でこざる。もし鼻ても落るやうな所は。かならず御無用になされ。とすこし分別あり貞なり。哥學者。貴樣のやうに。和らかにいわるれは。我等も岩木にあらされは。いなとは申さぬ。成程古哥のうち。北州の法にかなふたがこさる。儒者云。オヽサ。詩にも我等それのみを。よふ覺へて居ます。仏者鼻をひく〳〵して笑ふ。エヘヽエヘヽ。詩哥になくて何といたそふ。サア〳〵論は無益。先承りたい。儒者いわく。笙歌日暮能留客と申は。仏者いわく。アヽ。おつしやるな。鄙の景色すかた。やかて目の前に見るよふでこさる。哥學者云。身を盡しても逢んとそ思ふ。仏者云。是はうまいことだ。儒者云。時々來往住二人間。仏者云。ハハア。茶屋船宿のすがたをよふいふた。儒者。さりとは貴樣のやうに。心を付てもらへは本望しやのふ。なん。といゝながら。哥學者にむかふ。哥學者うなつきなから。乙女のすかたしばし。といゝなから。ふたりニむかい。是は太夫の揚屋入りをよませられし歌しやが。とてもの事に題をきわめて。詩と歌とを引合てみたらは。どふこさらふ。仏者儒者云。是は至極〳〵。サア題を出しますぞ。

六帖目錄　その題のみをしるし。詩歌并に註釋次の卷に具ふ。

△太夫の揚屋入
女郎の被の内
三月の中の町
番頭女郎
年明の近い女郎
けんたいふる女郎
欠落した女郎
指を切し女郎
はやる女郎
はやらぬ女郎



心中した女郎
心中をいやがる女郎
俄に客のへつた女郎
素性のよい女郎
性あしき女郎
横に來る女郎
いやな客に請られし女郎
工面のあしき女郎
工面の出來ぬ女郎
賣られて來る女郎
親の爲に勤する女郎
お茶引き女郎
△初會能みへる客
初會切りの客
ふられし客
旅へ立つ客
早く歸らねばならぬ客
醉つふれた客
もらわれた客
喧嘩買の客
夜道をこはかる客
戸まとひした客
無緣法界の客
物に成てもいやな客
△子を賣りし親心
勤の身
たま〳〵逢ふ間夫
雨ふりの禿
率頭に揚つた新造
月見の寫の物
面白く逢ふ夜
夜番
船宿
惣雪隱
揚屋の紙屑籠
△質を置女郎
わるい病の有る女郎
床のよい女郎
居すまいのわるい女郎
床で骨を折し女郎
△水上の客
年寄し客
△大門の懸行燈
大門の番所
吉原の眞実

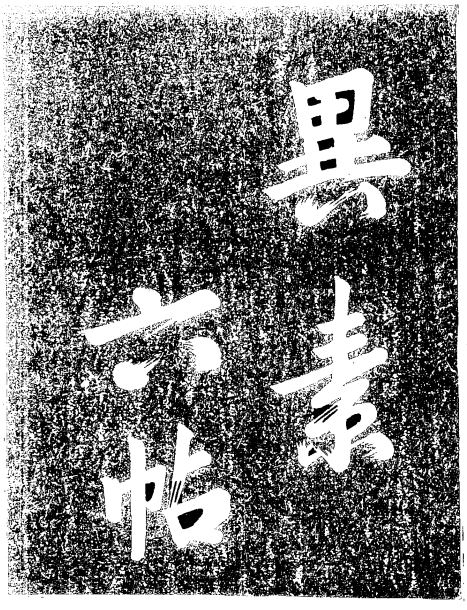
といふまての題にて。ふたりともに流るゝごとくにいひしは。我も聞覺えし唐詩と。百人一首の哥にて有けり。此時化者慾心のよだれをなかし。合掌して曰。誠に黄金の肌をみがき。二つ蒲團三つふとんの蓮臺に座し。有緣の衆生を救ひ。夜みせの行燈は迷の衆生を導き。昼となく夜となく。黄金の光たへす。ア、彼金光明所と說き給ふ事。ことむべなり〳〵。といふ時。淺草寺の初夜の鐘。ごん〳〵と響。おもてに人の足音おほく。ヤツツア コレサといふ聲繁し。三人は顔を見合て。サア。といわれしより。各袖形頭巾とり出し。みな〳〵かしらに打つき。何れへか出られし。我ひとり忙然となりて。はしめて筆は硯箱に納りぬ。

異素六帖上の卷 終

異素六帖跋

百數や舊代の拾遺集には。遊女の歌を入れ。人惜人恨の聖主は。淺妻の咏をのこす。加之。唐紅の中將は。著筒馴仁志嬬を戀ひ。加古知顏の法師は。江口君が爲に大悟を得たり。者足曳の大和言葉。諸越の芳野の里に。白雪の積る文筆裳。いづれか娼家妓郭の風流に洩んやと。松裳むかしの友達の咄を集めて。異素六帖と題し。光融和き春の日の。閑を助くる物ならんと。其後に跋する事しかり。

何遊堂爰歌



北刈

異素六帖

下

六帖五十五段通計

一初三全盛の盛をいふより以下乃
廿二段女郎けうへをいふ
一廿三より十二段客の事をいふ
一廿五より十一段雑事をいふ
一四十六より五段又女郎をいふ

とあり次

一五十一五十二又客の淫笑をいふ
一五十三より五十五まで総論

太夫の揚屋入

紫陌紅塵
拂面来
無人不道
看花回

乙女のとうさ
志りーー
そうん

紫陌紅塵とは唐の太夫の名あり
志ばくハむらさきのこちとも和胡ハ花茶
小むらさきとりつてたゆ乃通り名とすれ
る故り紅塵とハ名ハ紅ちりしまま
そるろうきもたゆ乃名とハ我名ハそ
お染の名入ハてる尾と名附貴船この
ゆへハ素人の人ハ近とハてかる
地そりとん

女郎の横の図

冷艶全欺雪
餘香在入衣

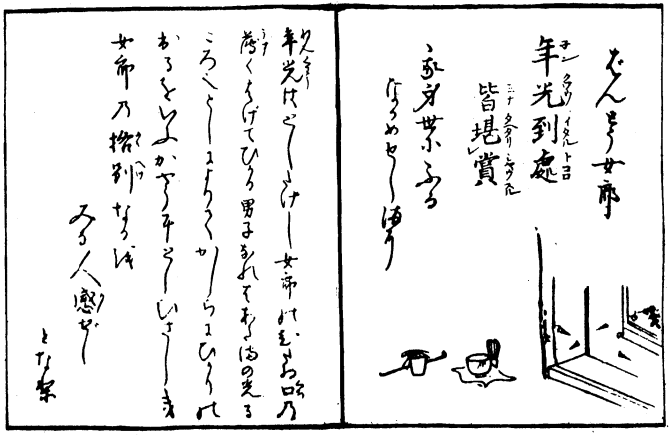
けふ九きりハ小ほひめるの船

冷艶とハはめ〳〵やきしとけまく
あつさむなく志ち〳〵和そまさ
肌の若れ伽羅乃かほり様さに
けふへきりきもし

三月廿中の町

名花傾國兩相歡
あひのかすきさ様さあるん

名花傾國とハ武況ハいとくもとつてこそ
美全鼻孔のそとけふ又ハ廿ハ傾ハ傾動
の傾ハあ亦とて人ハ曰いつあ〳〵きぐ
女郎と傾とハたのしむとうん


年光到處
皆堪賞
年光はうつりけり女房は
皆くらげてひろ男まれてあるはの光る
ころくしまうくやうらうひろれ
おるをとかやうやうしまうしまう
女房乃格別なるは
みる人感ぎ
年月の迫い女房
紅粉樓中
應計日
久しき
おとろへ
しれ
紅粉樓中女房の化粧すところ
のあさまを少びかうとしも
はなはなり
白眼看
他世上人
なり
白眼ハ
又年月
床往年
なり

名高しる女帝

返照入閭巷

憂来誰共語

あるて世ばし

返照ハ生を一生を過去一之〜く別世界の行屋なるを知れ巷の意味れ閭巷ハ町の裏屋〜あるて世間と止て客をあるて世を傍〜

ゆびと切〜女帝

憑添両行涙

寄向故園流

なるれもあへぬりうちかりあり

憑ハゆびをきりとりてむこうつく血眼〜り涙とあ〜しる〜故園ハ小塚と注を千血を小えんかへ出く流〜まつる〜

時花女帝

春潮

夜々深

人〜とたつねかいくもなし

春潮ハ〜はし汐時のますしりとく盈をきすし三結をむくとを汐のまひくとおや〜へくいへるなり

〜ゑ〜の女帝

客舎平居

絶送印

つゝ少むもの枕えハ〜ねや

客舎ハ女帝屋なり玉居ハ又世子けりわそをとりむくもなるとり〜

心中とゝ〻女郎

縱死
猶聞
俠骨
香

名ゝとなるゝ〻かをさきえ名れ

俠骨とは鄭軍の骨拾ひしたくハ大きゝ丈声ゝ〻コハ スキンセニ なし きやゝこゝろ〻ゝ〻ら名く 表とそ名の ゝ名あの昔かゝりゝのゝる とゝ名ま 名ゝ名形を立て ゝれ丈ハもとゝ なゝれ八丈ゝく又名まそゝるゝ とゝ名ケ月祭

心中とゝやゝる女郎

我心渺與際
河上空徘徊
人のいゝちれゝ〻〻ゝゝれ

渺〻〻てとハ廣風のゆちゝある能のゝ てゝあゝゝゝなゝハてゝハあけてゝく一ゝを あゝゝゝとゝ河上ハ川岸と通ゝ名くのゝく ゝゝ名ゝ女郎ハ川岸へゝゝてゝゝゝゝまー

俳ゝ書の河さ女郎

空山不見人
但聞人語響

あゝりてなゝゝ人のこゝーゝ

空山ハ空ゝ名ゝにゝゝくけゝゝゝんて 名ゝ名ゝゝゝゝ女郎ハ私ゝくの人れ 空ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝ あゝゝて ゝゝ橋ゝれ中ゝ獨虎ゝあゝゝゝ

素性のよい女房

美人天上落

高くくちなん

名ゝ花の中きれ

て上ち高くハやのうへ人とも[illegible]

もぐらよき人のいやーきつあす女房る

と[illegible]或説にて上ち高くるとハ行き女れ

勝るめなないと[illegible]することゝ

性あり[illegible]女房

澗水東流復向西

身乃いさはゝ

東里ゆつゝ

澗ハ間く宮夫のるく水ハ輝く宮夫すれ

身乃登者でハるゝぬ女人れて毛と間輝

と[illegible]東流とハ流れの身のひーれ人と

あやなー西の人とも[illegible]るめるとと[illegible]

[illegible]る女房

相見兩不厭

[illegible]

人か出りの章

五不厭とハ[illegible]

はゝとく[illegible]或説にハ不厭をお助のひ

[illegible]と[illegible]説[illegible]ずはゝ[illegible]

なれてく

いやが客ようゝれ女房

只有此山中

雲深不知處

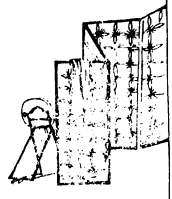
[illegible]

雲深ーてとハ[illegible]者頂天之

下晴雲覆とハ[illegible]

くゝんのお年ゆく女帝

妾心正断絶　君懐那得知



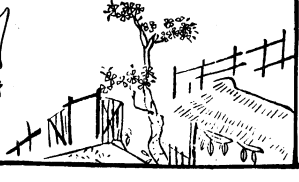
くゝんのあつき女帝

但見涙痕湿　不知心恨誰

人とも身ともとゝみつゝ

涙痕いとゝみのなゝめとうほとと

つゝあくびやめゝぐんそなくとゝ



故郷今夜　思千里

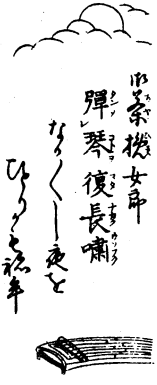
秋のさめてほゝゑめる女郎

獨在異鄉為異客
每逢佳節倍思親

うれしきまくらのあるきまくら

異てゝ異者の異ハ花里通商考ニ云風俗地女國ニ異ありといふ〻〻

佳節ハ俗日なりものゝ〻〻ことゝる歟



茶機女郎

彈琴復長嘯
なゝくゝ夜と
ひゝゝと秋年

嘯とハ虛の皮をむくといふるく秋ゝ和いまゝ詩のうたとつゝしるるゝ〻〻ぬゝ〻〻

孫なる何うたのうハえをむきて玉實のうれをとゞさいぞすこゝろ〻

初くちよくゝるる客

吳姬緩舞留君醉
今一ひのみゆきまくなん

吳服ハつゝ〻き女〻吳ハ初め迫ゝ英俊と吳服とゝひ差伴を吳外とゝひ食物ゝ吳を吳器といふ〻〻

初會切りのまゝ

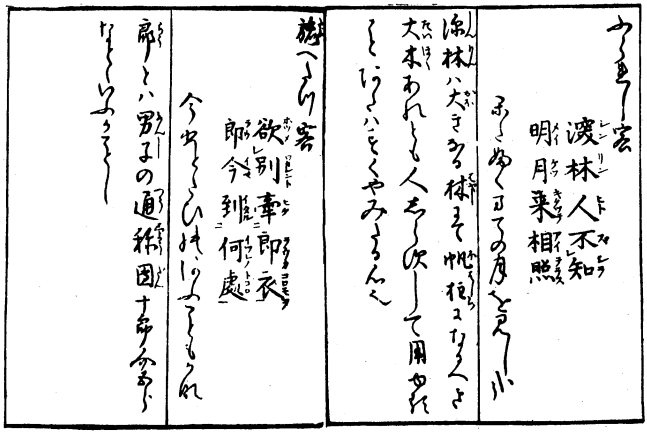
羽客窒歌此地遺
離筵數處白雲飛

りゝ来もゝゝゝ恵乃遠ゝ面

羽客ハてゝ〻がまゝてびゝりくまくく

恋せゝ罪ゝるハ補畔の翅をけるとゝゝ

そくひゝゝ



渡林人不知
明月来相照

渡林ハ大きなる林なれ共人とも知ず大木あれども人もなく只月のみ照るばかりなるべし

欲別韋郎衣
郎今到何處
今宵こゝにとまりもなれ

郎とハ男よの通称因ナ事なり

遠莫
鄰雞
下五更

あつきけるうさぎの八下五更

醉臥沙場君莫笑
古來征戰幾人回

醉つぶれて沙場に臥ても君笑ふなかれ

沙場ハ砂利場と思ハれとして

ゝハれゝ客

閨中只是
空相憶

ころもゝゝ比枕も袖も

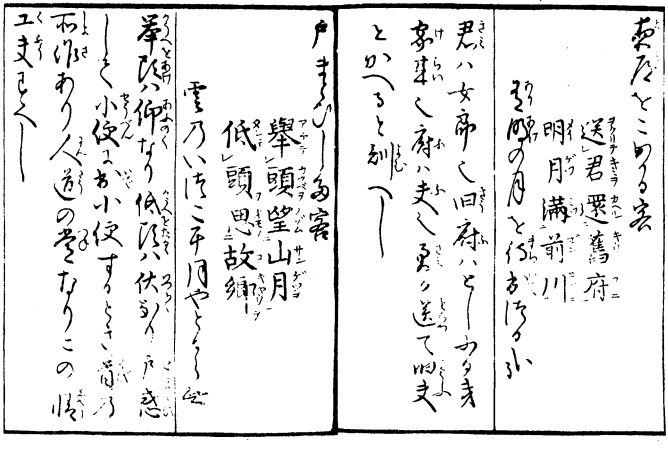
閨を離く妻ハ恋とも字なり門のうちゝ書あるかゝちゝ人ゝ

喧嘩買の客

獨自狂夫不懷家

人ゝ志ゝ秋くゝるゝゝもれ

狂夫ハ疑なりきゝ男ゝ獨とハ者ゝ毒ゝ恋ゝ人ゝのゝくれてゝゝ訓するハ人乃非を元風ゆゝ



蕨屋とこゝる客

送君要舊府
明月滿前川

君ハ女帝ゝ回府ハゝゝゝ
京来ゝ府ハ夫ゝ勇ゝ送て明夫
とかゝるとゝ訓ゝ

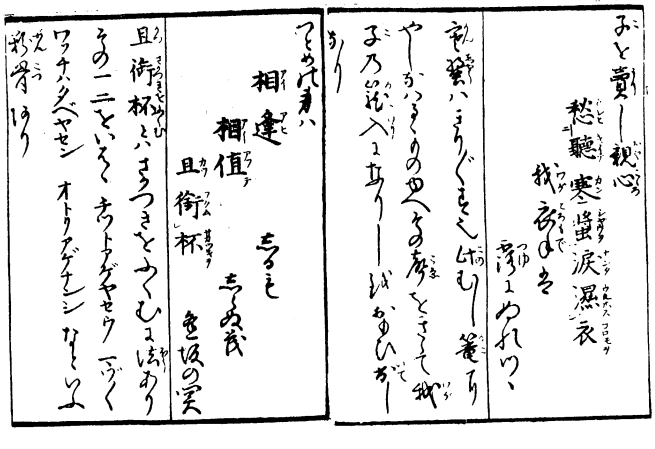
戸まゝゝゝゝ客

舉頭望山月
低頭思故鄉

雲乃いちゝ中月やゝゝゝ空

舉頭ハ仰なり低頭ハ伏なり戸惑ゝゝ小使ゝお小使するゝゝ前乃而乃あり人道の者なりこの時ユまゝゝ

法界の宴
今夜
何處
不知
病
秋風至
何處
人
秋風至
秋風至
相逢
相値
且衛杯
且衛杯


おと敷し
秋聽寒蟲淚濕衣
我家は
清しめれつ、
相逢
相値
且衛杯
色坂の笑

知有前期在
難分
此夜中
愛の通行
人やとらん

面影の
毛
莫令長袖倚欄干
けしやの
ゆめのうつゝも秋

前期とハたゞ注ゐやうく契約なるべしよ
今考る小期の字蓋起の字なるべし
前起なるべし　此句ハ
次の句とつゝいつる
長袖ハ小そで也さのこぶくすると
すてゝ小ゝ也ゆえ
けしやらんゝ神とけしゝ又弘法
たいこゝ揚てゝ彩遊
閨中少婦
不知愁　ゝゝ
星中ハまゝゝ注するゝく少婦を
ゝんぞゝとよ
ゝまのけしゝて　あゝとハ先も物送ゝ
格ゝゝ（ゝゝゝ）

月見の基礎

一時回首月中看

之笑のごとく

月のうち

◎前とハ中の町の方へくびを回セバ

月の長屋ありかいく花茂ハ

スタれ長屋あるく

向向く趣

總向春園裡

花間笑語聲

なんぞ〜ものしわさはしいれ

春風ハ春と、春を対するとさ雪中立

花ハ春ハ春ハ春ハ春ハ菱合鼻孔り

春のもの春の時ハ春中眼ゑ春ハ春やも

人ハ笑ひなるかの口を春ひとひなる春ねとも

夜番

旅館寒燈獨不眠

向さとれて春ろ更ふくる

旅館ハ春ハ春ハ春ハ春ハ春ハ春ハ春ハ

人ハ春なり

宿やど

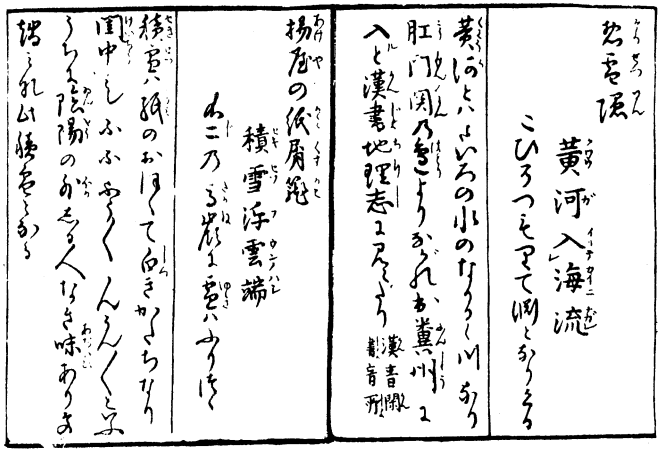
江南江北

送客歸

春〜〜他

なん井ュ

小〜〜流〜〜



黄河入海流

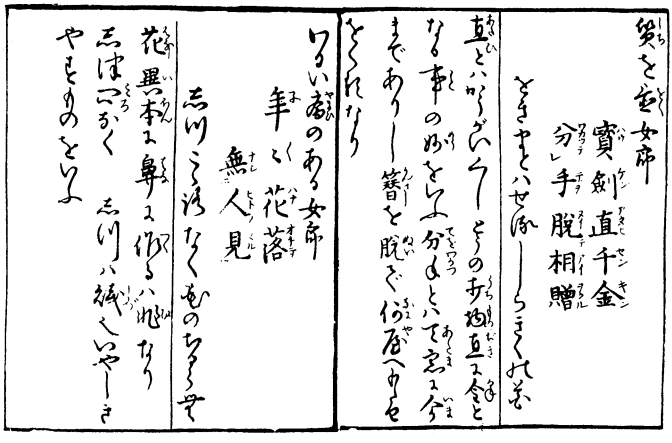
黄河の水は色の小のなるゝ川なり
肛門関乃きとりおれお薫州と
入と漢書地理志に見えたり 漢書閣 影音刊

揚屋の紙屑籠

積雪浮雲端

わこの乃るゝ雪は雲はみりき

積雪は紙のおほくて白きかさちなり
宣中しふふゝくんんくとゝ
るゝと陽のあるゝ人なき味あるよ
ゆゝれ山陽をるゝ



賢を愛女帝

寶剣直千金
分手脱相贈

ときやとハせ涙——ちきくれ者

直とハかゝ〻〻〻とゝの歩均直に金と
なる事のめをゝ分よとハて高に今
まであり——簪と脱ぐ伊左へゆを
ゝくれなり

ワるい者のある女帝

年々花落
無人見

志川こゝ浅なくものなるゝ

花異本に鼻に作るハ非なり
志ほつゝくく 志川ハ城くいやーき
やとものをゝ

客心　爭日月

庵乃ふ女帝

なくもれと思ひるル

爭日月とハ日數月數物づめ

まセんと害ごふあるふなり

居ずまひの悪い女帝

峨眉山月

半輪

秋

月乃

くもの

庵で貴を打　女帝

孤城遥望玉門關

黄沙百戰穿金甲

孤城ハ一軍主の城ゝ黄沙ハ功者と書

面ぞ穿金甲ハ軍士甲冑を穿し

穿甲を破んと　ゝ附とうけ

我ゝまもれ考ゝへし

水上の害

此夜斷腸

人不見

口神でも

まぬ

いろんゝ

ふのぬ

防御とハ家はゞいもうをとり

人ふん共者れ乃人ハ防御と

思ゝしめをいる乃り

年あり一宵
春光
不度
玉門関

春光は春のごとくこの年くうのうきにわかなくぬゆく
ふ夜くい屋にあるく

大門の楊柳
雙掛
日月照
乾坤

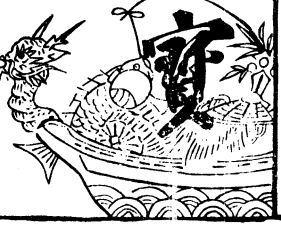
乾坤とハ二階とハ新吉原

大つゝ勤
為問門前客
今朝幾個来
幾数福すめぬすぬ乃客

幾個来の間ハ嬉と思ふ或いそく
なしと答る義れむひ門前乃
なつまると乃ゝなすあゝ

吉原は実
黄金不多
交不深

やゝ乃ゝく
あ
一の学ゝく



寶暦七丁丑歳正月吉日

書林

東都淺草御藏前茅町二丁目
六河亦次郎板

本銀木町四丁目
柴田彌兵衛